

彼女に対して抱いだいていた憧れという感情も、今にして思えば初めて見た——いや、その歌声を聞いた時から、もつと特別なものだったのだと思う。

でも当時の私は、恋という感情すらまだ自分の中で曖昧あいまいだった私は、同姓に対してそんな感情を抱く事など考えたりもしなくて、自分の中に芽生えた淡い想いをただ純粹に彼女へと向けるだけだった。

それに満足していれば。その姿に、その歌声に、ただ憧れているだけで満足していられれば。今も、そしてこれからも私は彼女の傍そばでこれまでと同じように一緒に笑っていられたのかもしれない。

あるいは彼女が、もしくは私が男の子だったりしたのなら、こんな勘違いもなく素直に一目惚れしたと言えたのだろうか。

とはいえ、考えたところで現実には『彼女』と『私』で、どれだけ深く想っても、どれだけ強く願ってもそれは覆くつがえらない。

関係ないと言い切ればよかつたのだろうけれど、生憎あいにくと私はそこまで強くもなければ、向こう見ずな訳でもない。世間体だとか周りの目だとかもある。いくらそれらを気にしないといても、それは私の側の都合であつて、彼女もそうだとは限らない。今更気付いた私の中のこの想いを、言葉ではうまく言えないこの想いを彼女に包み隠さず伝えれば、これまで築いてきた私達の関係は簡単に終わってしまうのだろうか。

仲の良い二人。

——先輩と後輩として。

——同じ部活の仲間として。

——そして友達として。

そんな風から周りから言われる事が辛くなってきたのはいつ頃からだったか。

言われる度たびに私と彼女が『私』と『彼女』であるという事を突きつけられているような気がしたのだ。

普通でないということは解っている。解っているけれど、だからといってどうする事も出来ない。出来そうにない。

私は気付いてしまった。私は知ってしまった。切っ掛けなんてものはない。自分でも知らない間に、ごく自然に、疑うこともせず、さもそれが当然であるかのように、私は彼女に——そう、私はルカに恋をしていたのだ。

φ

私が彼女と出会ったのは、高校に入って間もない春先のことだ。

入学式から続いた、いわゆる新入生に向けて、というあれこれも大体終わって、最後に残っ

た部活紹介のオリエンテーション。まだ肌寒さの残る体育館に並べられたパイプ椅子が、式の時の退屈さを思い出させて少し憂鬱ゆううつな気分にならせてくれたものの、始まってみれば、なるほど中々楽しいものだった。

外での活動がメインな部活ほどネタに走ったりするのは中学でも高校でもそうそう変わらないうので、時折新入生の側からも吹き出すような声が聞こえてくる。勿論真面目に部活紹介を行っている方が多いのだけれど、中には部活内容そっちのけで漫才じみたことをしている所もあり、そしてそれを見て笑っている先生もいたりするあたり、まあなんとするか、自由な学校なんだなあと思えた。

そうして暫く、特に部活に入ろうとも思っていないなかった私は、チアリーディング部とかそんなのもあるんだなあとか、ユニフォーム可愛いなあとか、そんな風に暢気のんきに眺めていたのだけれど、

「続きまして、合唱部による紹介と演奏です」

流石さすがにそろそろお尻が痛くなってきた、もぞもぞと体を動かしていた時に聞こえてきたアナウンス。

始まる前に渡されたプリントを見てみると、最後から五番目の所に確かに合唱部の文字があった。

少しだけきていた背筋を知らず伸ばし、私はステージの方を見る。

音楽、その中でも歌には興味があった。小さい頃から聞くことはもちろん、けれどそれ以上に歌うことが好きだった。

部活に入つてまでやるつもりはなかったけれど、それでも気になるものは気になる。場合によつては——などと思つて体育館のステージ脇からそろそろと出てくる合唱部の先輩達に目を向けていると、

「おお……美人さんだあ……」

二列に並んだその前列中央辺り。ここからでは細かな所までは見えないものの、それでも彼女が周りとは一つも二つも違うということだけはよく解る。別に特別なことなんて何もしていない体育館のステージなのに、彼女にだけスポットライトが当たっている感じ。すらつと伸びた手足は細くて長くて、可愛いと評判の胸元でリボンを結んだ制服はそんな彼女を一層引き立てるドレスのよう……とか、この前読んだ本で主人公がそんなことを言っていた気がする。

なんにしても、制服目当てで片道五〇分の電車通学を受け入れた身としては、自分なんかがこの制服を着ていていいんだろうかと考えてしまうくらいには、彼女はただそこにいるだけで輝いていた。

どうやらそんなことを思っていたのは私だけではないようで、何気なく周りを見渡すと大半の人が羨望とか落胆とか、色々と複雑な心情が混ざった溜息を吐いていた。もつとも、そんな事態に陥っているのは女子ばかりで、男子は揃つてざわついていたのだけけれど。



最後の一息を伸ばして、スタジオに響いていた声が抜けていく。

余韻、という物だろうか。やがて私の耳と身体に響いていた音が抜けていく。

「おつかれさまでしたー」

「はい、お疲れ様でした」

隣の部屋からマイクを通じて聞こえた声に返事をして、ヘッドフォンを外す。

手応えとしては九十点といった所だろうか。

足りているけど、足りていない。

「ルカちゃん、お疲れ様。今日はこれで上がりだよ。もちろんオッケーが出ればね」

ブースからコントロールルームに戻ると髪をアップにまとめたマネージャーさんが待ち受けてくれる。

「あ、マネージャーお疲れ様です。向こうはもう？」

「うん、ミクちゃんの方も終わってるよ。待ってるだろうから電話したげて」

暖かいウーロン茶を差し出されて、口をつけながら曖昧にうなずく。

そっか、ミクの方が一足先に終わったのね。

ふと時計を見ればすでに外は真っ暗であろう夜七時。今日のミクの予定はボーカルレッスンだった筈だから、六時には終わっている筈だ。

「ミクちゃん今日の休憩時間中、ずっとルカちゃんの話してたけど、ここ最近さあ、二人とも

ホント仲良いよね。何かあったの？」

「え、あー……どうなんでしょう？」

よもや付き合い始めました、などと言えず、答えをはぐらかしてしまう。気のせいだろうか、マネージャーさんの眼鏡が光ったような……

「やつぱりアレ？ 付き合い始めちゃったとか？ ベッドの中で夜の発声練習とかしちゃうてるの？ ねえどうなの？ やつぱり恋人同士ならそれぐらいしちゃうわよね、いいなあうらやましいっ！ もう爆発しちゃえ！」

「そ、ん、な、訳ないですよ。女同士ですし。マネージャーさんとは違うんですから！」

鼻息も荒く詰め寄ってくるマネージャーさんの顔を手でぐいぐいと押し離して、嘘を吐く。

本当はミクと付き合い始めた……もとい、ミクからの積極的なアプローチに負けてしまったというのが正しいのだが、ここで下手な事を言つてマネージャーさんを燃え上がらせてもしようがないし、何しろ周りにはまだ人も多いので迂闊うかつな事を言うのは避けたい。

「なーんーでー？ 私、二人の仲なら全力で応援しちゃうけどなー」

「まだお仕事中ですし……」

冗談じゃない。いくら同性愛に寛容なマネージャーさんでも、芸能関係のお仕事な以上はプライベートでも気をつけなければならぬのだ。

「マスタリングの確認作業終わるまでは静かにしてましょよ」

「ん、それもそうね」

マネージャーさんの表情が変わる。一瞬にして仕事の表情を取り戻したマネージャーさんは真剣な顔をして沈黙する。

ヘッドフォンを真剣な表情でかけていた音響監督さんが振り向いて、ちよいちよいと手招きするので行ってみると、ヘッドフォンを手渡される。

「結構いいと思うんだけど、自分で聞いてみて」

「はい」

ヘッドフォンを被って、流してくれとサインを送る。

耳に届いてくるのはアコースティックなギターで始まる出会いと、幸せの歌。

これからの季節にふさわしい、桜色の恋歌が耳に届けられる。

歌詞の中の少女は掴まる腕の温かさと安心感、さりげない微笑みの口元、何にでも幸せに感じているだろう。

伴奏ももちろん、それに合わせて少女の跳ねるような鼓動を後押しするようなテンポで進んでいく。

歌詞に合わせて近まる距離、唇が迫る。

だが、そこで私はヘッドフォンを外した。

「監督」



「言ってみて」

はい、と私は返事をした。

「多分、このままでも売れるとは思いますが。ですけど、それでは及第点でしかないと思います。声やイントネーションとBGMが薄利はくりしてるような、そんな気がします」

「んー、そうなんだよな、オレもそれを言おうかどうか迷っていたんだ。もちろんこのままでも充分売り物になるレベルではあるんだが……」

「私の力不足、ですかね？」

「いや、そうじゃあないんだ。ルカさんはここ最近の新人じゃ歌唱力は抜群にある方だと思う」

「ありがとうございます」

「ただ、なんというかな。声もいいし、歌詞もいいし、音もいい。だけどまだ感情が上手く乗り切っていないんだろう。もちろんルカさんなりに歌詞に感情移入して唄ってくれているのはわかるんだが……」

「唄い方が甘いつて事でしょうか？」

「いや、喉の使い方はいいんだ。発声もよく聞き取れる。声も満点を上げてもいい。このままマスターリングを終えて提出してもいいんだが……もう一日頑張ってみないか？」

「確かに予定ではマスターアップまであと一回スタジオでの収録日がありますけど」